

京都府の教育をリードする中丹の教育の創造

みんなの笑顔Ⅱ

～特別支援教育の視点を生かして
授業づくりをサポートします～



支援が必要な子どもたちへの指導の工夫は、みんなの「分かる」につながります。
これまで先輩から後輩へと受け継がれてきた「分かる授業づくり」について、特別支援教育の視点からヒントになる取組や工夫をまとめました。
本書は、前号「みんなの笑顔」と併せて活用し、授業づくりにおいても常に工夫改善されることを願っています。

京都府中丹教育局

学習基盤を育てる



Point 1 学習準備 ~学習に向かう姿勢をつくる~

特別支援教育の視点から

学習を気持ちよく始めるためには、最低限必要な学習用具がそろっていることが大切です。あるはずの物がないという状況に緊張が高まり、学習以外のことでエネルギーを使ってしまう子どもがいます。そのようなとき、担任が学習用具を用意しておき、貸し出すことが有効な場合もあります。発達の段階に合わせて、用具の管理を子ども自身ができるよう指導する必要があります。また、学習用具は一律ではなく、「柔らかい鉛筆や、弾力のある下敷きを使う」など、子どもの実態に合う物を使わせる工夫をしましょう。

●必要な学習用具をそろえる●

学年が上がってくると、必要な物も増えてきます。絵や一覧表などを用いて必要な物を自分で準備できるよう指導したり、記名を徹底させたりします。低学年の頃から、置き場所を指定するなど、管理方法について指導することや、机の中を整理・整頓できるよう習慣付けていくことも大切です。

●筆箱の中をそろえる●

毎日必要な筆箱。授業に集中させる観点からもできるだけシンプルな物を持たせたいものです。

小学校では、自分で管理しやすいように、できれば箱形で鉛筆が固定できて中身が一目で分かる物が望ましいです。例えば、入門期には「鉛筆5本・赤鉛筆1本・消しゴム1個・定規1本」のように物と数を具体的に示して指導します。その際、筆箱など、できるだけ6年間使うように指導すると、物を大切にする気持ちが育ちます。



Point 2 聞く・話す活動 ~学び合う学習集団をつくる~

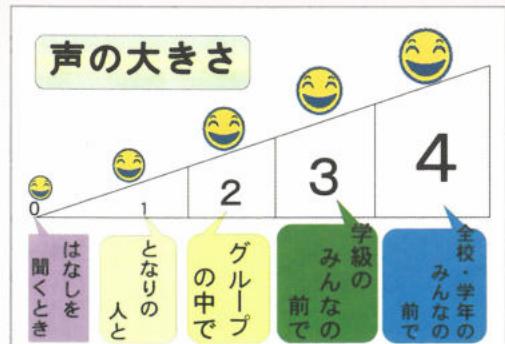
特別支援教育の視点から

聞く、話すという活動が大切にされる授業は、学習効果が期待できます。しかし、子どもたちの中には、「発言の順番を待てない」、「話を最後まで聞くことができない」、「どの声に集中してよいのか分からない」など、聞くことが苦手な子ども、また、自分の考えなどをうまく話せない子どもがいます。聞く、話すことについてルールをつくり、学級のみんなが守れるよう、練習を積み上げることが大切です。学び合う授業を成立させるために、新学期の早い時期に徹底させたいものです。また、教員は、お手本となる話し方や聞き方を心掛けることが大切です。

●よい話し手●→聞き手にとって聞きやすい話し方

発表するときは、指名されてから発言するというルールを身に付けさせます。

場に応じた声の大きさや言葉遣いを意識されることや、文末まできちんと話す指導は、言葉を選んだり、相手に伝わる話し方を工夫したりすることにつながります。



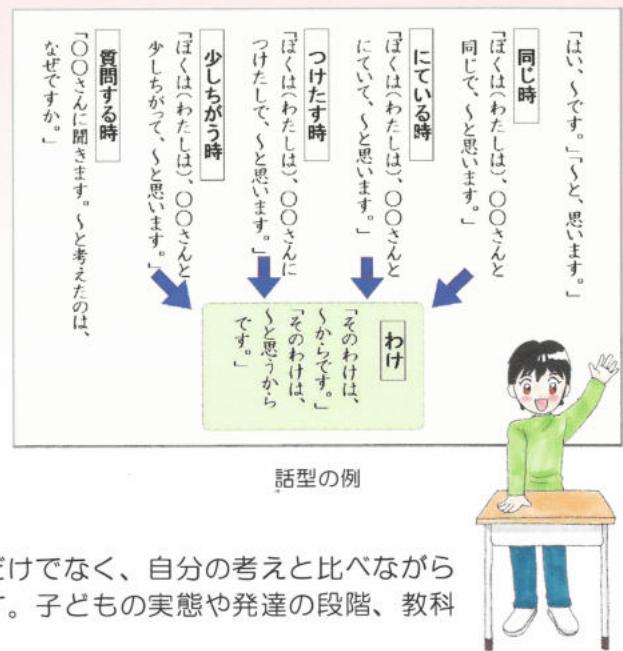
●よい聞き手●→話し手が気持ちよく話せる聞き方

話し手を見ることはもちろん、しっかり聞いていることを相手に伝わるようにすることが大切です。うなずいたり、相づちを打ったりしながら聞くことも効果的です。相手の言いたいことを最後まで聞くことができる学習集団が育つと、話し手は安心して話すことができます。

●学び合う意識●

自信のない意見でもみんなが受け止めてくれるという安心感は、学び合う学習集団には欠かせません。相手が伝えようとする内容を汲み取り、自分の考えを積み重ねていくことができると、学び合いは活性化します。このことは、お互いを大切にしようとする日ごろの学級経営との関連性が大きいと言えます。

「話型を活用すること」を指導すると、話しやすくなるだけでなく、自分の考えと比べながら聞く力や、自分の立場を明確にして話す力などが高まります。子どもの実態や発達の段階、教科の特性を踏まえた指導が重要です。



Point 3 家庭学習 ~学びを確かなものにする~

特別支援教育の視点から

すべての子どもが家庭学習に取り組むことができ、主体的に学習に臨む習慣を身に付けるためには、「各自が今持っている力でやりきれる内容であること」や、「子どもなりに、取り組むことに意義が感じられる評価があること」などが大切です。

発達の段階に応じて、「こつこつと粘り強く取り組む力」、「計画的に取り組む力」、「自己評価ができる力」を付けるなど、学校全体で共通理解を図って取り組むことが大切です。

●宿題●

授業の内容を振り返ったり、授業で学んだことの定着を図ったりすることができる適切な課題を設定することが重要です。その際、個に応じて、難易度や分量が調整できる課題や調べ学習など、単元や発達の段階に応じて学習への興味や関心を広げることができる課題も設定したいものです。

また、「テレビを消す」、「姿勢に気を付ける」、「字は丁寧に書く」など、家庭学習に臨む約束を保護者と連携して、意識付けることもよい習慣化に役立ちます。

●自主学習●

小学校高学年や中学校では、「自分のために、自分にとって必要な学習をする」ことが大切になってきます。しかし、何をどう学習するかという計画や見通しの段階でつまずく子どもが多いのが現状です。

そこで、授業での振り返りを生かして、「苦手なところを復習すること」や「さらに学びたいことを調べること」など、自主学習へつなげる言葉かけや例示が必要になります。

また、継続して取り組ませ、学習する習慣を身に付けさせるためには、例えば、学習記録表の取組も効果的です。

他の子どもががんばる様子（学習時間、ノートなど）に触れる機会を設ける。

中学生の学習記録表の例

学習時間 積み取り大作戦！	
今週の目標	1週間
月曜	水曜
火曜	木曜
水曜	金曜
木曜	土曜
金曜	日曜
土曜	
日曜	

かき立てるため、折に触れ
教員がアドバイスする。

自分の努力の足跡（ノートの冊数、累積学習時間）から満足感が得られるようにする。

自分の学習の様子を見つめる欄を設ける。

集中できる授業を展開する



Point 1 リズム感のある学習 ~集中力を高める~

特別支援教育の視点から

子どもたちが授業で学力を付けていくためには、集中しやすい授業展開を工夫していく必要があります。子どもが一つのことに集中できる時間は、10分～15分位と言われています。ずっと話を聞いたり、同じ活動が続いたりすると集中力の持続が難しくなります。学習内容をいくつかの短い時間に分けて、メリハリをつけ、リズム感のある授業を構成すると集中力が持続しやすくなります。

●授業のユニット化●

授業を10分～15分程度の短い時間ごとで組み立てます。作業や話し合いなどのユニットを3つ～5つで構成していくことにより、変化のある授業となり集中力が持続しやすくなります。

●動と静の組み合わせ●

動（書く、話す、作業する、手を挙げる、起立するなど）と、静（見る、聞く、考えるなど）を組み合わせることで脳を適度に活性化させたり、休めたりできます。そのことにより、集中し、落ち着いて授業に取り組むことができます。



ADHDなど発達障害のある子どものなかには、授業中に体を動かしたいという欲求が高い子どもがいます。その場合、きつく叱ったり、強制的にじっとさせようとしたりしても改善するものではありません。「授業中にプリントの配布係をさせる」、「黒板に書かせる」、「全員に動きのある活動をさせる」など、公然と動ける機会を多くすることで、脳が刺激され落ち着くことがあります。

Point 2 導入 ~やる気と見通しを持たせる~

特別支援教育の視点から

授業開始の挨拶は、休憩時間と学習の時間を切り替え、学習への心構えをつくります。また、授業に集中して取り組めるかどうかは、授業の導入によって大きく左右されます。導入では、「できそう」、「やってみたい」という意欲を高め、やる気と見通しを持たせることが大切です。導入で授業の流れを提示して見通しを持たせることで、集中しやすくなります。

●目標(めあて)と流れの明確化●

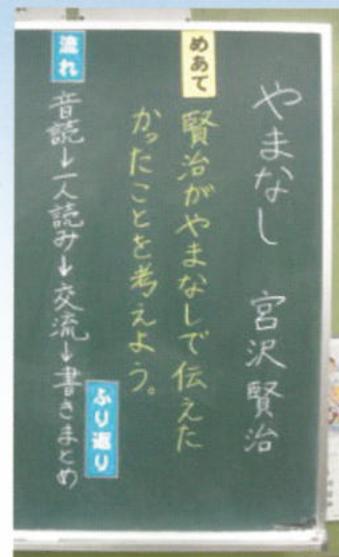
本時の目標(めあて)を明確にするだけでなく、学習の流れも示すと、見通しを持って取り組むことができ、集中力が持続できるようになります。目標(めあて)は、授業のまとめの際にも活用します。

●基礎的な知識の復習●

導入で、前時の学習を振り返ったり、既習事項の復習をしたりすることは、本時の見通しを持つことにもつながり、やる気を高め、主体的に学ぶ意欲を引き出します。また、授業の最初にフラッシュカード、小テストなどで復習することにより、基礎的な知識の積み上げを行うことも大切です。

●興味を引き出す発問や具体物●

興味・関心を引き出す発問と具体物の提示は、授業に取り組む子どもの意欲を高めます。聞く・見る・触るなど聴覚や視覚、身体感覚などの五感に働きかけるとさらに効果的です。



目標めあてと流れの板書例

Point 3 展 開 ~多様な学習形態で個々の力を高める~

特別支援教育の視点から

学習形態(指導形態)は学習内容の定着を左右するとしても重要なものです。学習形態を工夫することで、子ども同士のコミュニケーションが図れ、学習意欲を高め、理解が深まります。子どもの実態や学習内容に応じて、最も適切な学習形態を組み合わせ、効果的な学習が行えるよう工夫する必要があります。

●個別学習●

個に応じた対応をするためには、一斉指導だけでは困難な面もあるので、個別学習に取り組める工夫が必要です。

- やり方が分かる手立てを示す。
- 自分のペースで学習課題に取り組むことができる工夫をする。
自分のレベルに合った活動が選べる工夫(A問題やB問題など)
課題の分量を調整することができる工夫(5問コースや10問コースなど)
- 分からぬときは、ヒントを見ることができる工夫をする。
書き方が分からぬ→書き方の例を見ることができるなど

第2回 分数のたし算

① $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$
② $\frac{1}{3} + \frac{1}{5}$

第3回 分数のたし算(ヒントあり問題)

① $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} = \frac{\square}{6} + \frac{\square}{\square}$
② $\frac{1}{3} + \frac{1}{5} = \frac{\square}{\square} + \frac{\square}{15}$



中学校での個別学習の様子



中学校でのペア学習の様子

●ペア学習●

全体の中で意見を発表することが苦手な子どもにとっても、自分の意見が述べやすくなります。自分の意見を述べることは、学習に参加し学習を深めることにつながります。

- 人間関係などを考慮し、隣に座る子どもやグループの人数に配慮する。
- 子どもがグループ学習で何をするのか、内容や方法が具体的に分かるようにする。
- グループのメンバーの役割(司会、記録、用具管理など)を明確にする。
- 聞くとき、話すときなどのルールを確認しておく。
- できるだけ発言するなど、一人一人の考えをしっかりまとめさせることを基本にする。

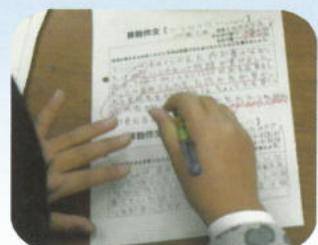
Point 4 まとめ ~達成感・充実感を持たせる~

特別支援教育の視点から

自分や友達の学びの振り返りや評価は、一人一人の理解を確かにします。また、分かった・できたという達成感や充実感を味わうことで、学習意欲が持続するようになり、自尊感情も高まっていきます。

●本時の振り返り●

板書を活用し、本時の目標(めあて)に立ち返って授業を振り返ることにより、学習のポイントが明確になります。例えば、重要なポイントをまとめたり、自分で問題を作成したりするなど、ノートやワークシートにポイントを書くことで、定着しやすくなります。



●評価●

授業の終わりには、分からなかったことが分かるようになったり、教員や友達から評価されたりするなど、子どもの達成感や充実感を感じ取れるような工夫が大切です。こうした自己評価や相互評価が、次の意欲へつながっていきます。

指導技術を高める



Point 1 板書と教具の工夫 ~理解を助ける~

特別支援教育の視点から

授業の中のたくさんの情報に優先順位を付けたりまとめたりして、重要なキーワードや内容がまとまった形で視覚情報として提供される板書は、記憶しておくことができにくい子どもにとって、大きな手がかりとなります。

また、授業の内容に興味を持ちにくい子どもを引き付ける工夫をすることは、ほとんどの子どもの学習意欲を向上させることにもつながります。その一つが教具です。具体的な操作や視覚情報は理解を助けます。

●授業の流れが分かる板書●

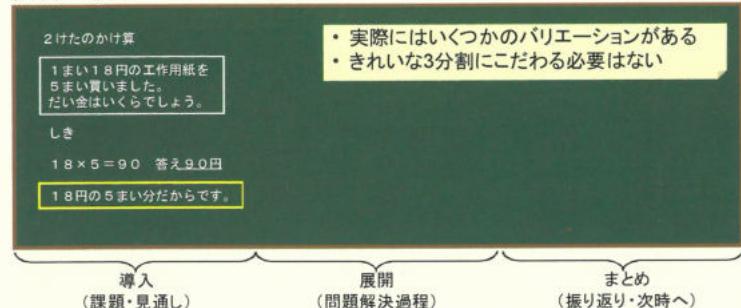
子どもの思考の道筋を示すものとして、本時の学習の経過が分かるような板書を心掛けたいものです。チョークの色は、一定のルールを持って使い分けます。また、カード、図、表、意見ボードなどを活用して、板書を効果的に整理することが必要です。板書の構造化は、子どもへの効果的なノート指導にもつながります。

●意欲を引き出す教具の工夫●

理解に時間がかかる子どもにとって、具体物を実際に操作することが効果的です。また視聴覚機器を活用し、絵や写真、動画などを見せることによって、さらに理解を深めることができます。



板書の流れ



白墨(チョーク)の使い方



国立教育政策研究所初等中等教育研究部研究員 山森 光陽先生
「平成21年度中丹地方教職員研修大会講演資料より」

Point 2 分かりやすい指示・発問～主体的に学習に向かわせる～

特別支援教育の視点から

語尾や内容が曖昧な指示は、文脈や状況に応じた言葉の理解がしにくい子どもにとって非常に分かりづらく、勘違いをさせてしまうことになります。分かりやすく言い切る指示は、どの子どもにも伝わりやすい指示の出し方です。

聴覚保持が苦手な子どもにとって、言葉だけの指示・発問はすぐに消えてしまいます。大事な指示・発問は、視覚情報も合わせて提示することが必要です。

教員の指示や発問が的確であれば、子どもたちは授業に主体的に参加することができます。教員の声に注意を向ける習慣を付けるためには、子どもたちが「教員の指示や発問をよく聞いておくと授業が楽しくなる」という実感を積み重ねることが大切です。

聴覚保持・耳からの情報を記憶しておく力

●短く具体的な指示●

- ・全員が注目していることを確認する。
- ・短く区切って、一つずつ具体的な言葉で言い切る。
- ・言葉だけでなく、板書や絵や図など視覚情報も合わせて活用し、指示内容を分かりやすくする。
- ・複数の指示を出す場合は、初めに「今から3つのことを言います」というように、子どもたちが見通しを持って指示を聞けるような話し方を心掛ける。
- ・語調にも変化を付ける。



<分かりやすい指示の例>

「名簿の順に、廊下に並んで待ちましょう」



名簿順だから、
○○さんの後ろだな！

<分かりづらい指示の例>

「いつものように、並んで待ちましょう」



背の高さの
順かな？
グループご
とかな？

名簿の順
かな？
どこに並
ぶの？

●吟味された発問●

発問は、子どもたちの多様な考えを引き出すため、十分に吟味する必要があります。

重要な発問はカードなどを活用し、いつでも見て確認できるようにしておくことが大切です。発問のあとは間を取り、子どもたちに考える時間を与えます。

Point 3 効果的な言葉掛け～意欲を引き出す～

特別支援教育の視点から

状況に合わせた言葉の解釈がしにくい子どもには、タイミングよく具体的なほめ言葉や注意の言葉をかけないと、何をほめられたのか、何がいけなかったのか分からず、次の行動につながりません。

教員の語調や語気の変化は、子どもへの注意喚起を促します。そして、何よりも大好きな先生に認めてもらえる場面が多くなるほど、子どもは、自信と意欲を持って学習活動に取り組みます。

効果的な言葉掛けは、信頼関係を築く基盤になります。

●机間指導●

どの順番で机間指導にあたるか、どんな言葉をかけるか意図的に行うことが大切です。「個別の指示が必要な子には、まずそばに行って指示を与える」、「思いを伝えるのが苦手な子には、安心できる言葉をかける」など、子どもの実態を把握した上で必要な支援を行います。

また、次の活動でどの子を指名するかなどの個を生かす視点を持って机間指導にあたることも大切です。



目線を合わせて個別指導
にあたっています

●評価する場面●

身に付けてほしい行動やよかったですについて、例えば、「背中が伸びていい姿勢だね」「字を丁寧に書いているね」など、子どもが何をほめられているかが分かるように、具体的にタイミングよくほめます。



個を生かす視点でどの子
どもにも活躍の場が必要で
す

●表情と語調●

「ほめるときは、にこやかに喜んだ顔で伝えるようにする」それが、子どもの安心感、自己肯定感につながります。言語で伝わることは30%、表情などで伝わることは70%と言われます。子どもの前に立ったときのまなざしは、教師の心を映す鏡なのです。

また、声の大きさ、抑揚、スピードの変化等により伝わり方が変わります。全体的に落ち着いた雰囲気をつくるためには、トーンを抑え気味にした語りかけが効果的です。

授業づくりについて振り返ってみましょう

実践している…◎ 意識している…○ 意識していなかった…△

学習基盤を育てる

チェック項目	1学期	2学期	3学期
・持ち物等について一定の約束を決め、指導している。			
・学習に必要な物をそろえるための支援を行っている。			
・発達の段階に応じた話し方・聞き方・話合いのルールを指導している。			
・自信のない意見でも、発表しやすい雰囲気づくりをしている。			
・家庭学習の習慣化を図り、充実するための支援を行っている。			

集中できる
授業を展開する

チェック項目	1学期	2学期	3学期
・集中しやすい授業展開を工夫している。			
・やる気と見通しが持てるように、導入を工夫している。			
・個別の学習に取り組める工夫をしている。			
・ペア学習やグループ学習が効果的に行える工夫をしている。			
・達成感や充実感を持たせるような評価を工夫している。			

指導技術を高める

チェック項目	1学期	2学期	3学期
・授業の流れが分かる板書を工夫している。			
・子どもの意欲を引き出す教具を工夫している。			
・指示をするときは、全員が分かりやすいように工夫をしている。			
・発問は言葉を十分吟味し、子どもが確認できる工夫をしている。			
・意欲を引き出すための効果的な言葉掛けを意識している。			

中丹教育局管内の先生方へ

みんなの笑顔あふれる授業づくりには、個に応じた指導と子ども同士のかかわりを大切にした学級経営がされていることが前提です。

学級経営をサポートする「みんなの笑顔」に加えて、「みんなの笑顔Ⅱ」が参考になれば幸いです。

今後も、常に一人一人の子どもの実態を把握し、よりよい授業づくり、学級経営を目指していきたいものです。

皆様の御意見をお待ちしています。

平成23年3月



中丹プロジェクト21会議 みんなの笑顔プロジェクト

【研究員】

綾部市立綾部小学校 小林 昌宏
綾部市立吉美小学校 岡嶋 登
福知山市立昭和小学校 奥村 康枝
福知山市立雀部小学校 麻生 祐子
福知山市立南陵中学校 西村 竜明
舞鶴市立志樂小学校 森岡 寿美
舞鶴市立明倫小学校 矢野 裕子
舞鶴市立青葉中学校 木下 浩子

「みんなの笑顔」と「みんなの笑顔Ⅱ」は、中丹教育局Webサイトからダウンロードできます。

氏名